

ドイツ人学生の大学進学と職業展望

山本菜月

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

Advancement to university and selection of occupations by German students

Natsuki YAMAMOTO

Ochanomizu University :Graduate School of Humanities and Sciences

In Germany, an increasing number of young people are obtaining Abiturs and advancing to higher education. At the same time, university students' employment prospects are easily influenced by factors such as economic conditions, and many take jobs that do not fit the degrees they have obtained. This study analyzed interviews to elucidate students' attitudes toward advancing to universities, their thoughts regarding their own futures, and hopes for employment. The data used in the analysis consisted of the answers of 8 German university students in 2015 aged 19–34 years to questions concerning their employment, families, and so on. The results of the analysis showed that (1) not only economic independence and living away from home but also possession of a firm vision for the future increased students' sense of independence; (2) when women discussed their visions for the future, their accounts were based on having a family; and (3) students choose majors aligned with their interests and concerns and select occupations fitting their university studies. German students choose their majors based on their idea of future occupations they have held since before advancing to university. To ensure they do not enter unsuitable occupations, they must undergo job training and receive employment support while enrolled as students.

keywords : Germany, transition, Future perspective

研究背景と目的

ドイツの学校制度は長年、10歳程度で希望する進路や職業に基づいて学校を選択する複線型であった。基礎学校での4年間の学習を終えた児童は、2年間のオリエンテーション期間中に、基幹学校・実科学校・ギムナジウム、さらに近年はこれらに総合学校が加わった4つの学校のうちいずれかに進学し、そこでの学習を経てさらに上級の学校や職業訓練へと進む。基幹学校や実科学校を修了した生徒は、職業学校へ通いながら企業で実習を行なうデュアルシステムなどの職業訓練によって職業に関する専門的な知識を身に付け、就職に至る(坂野 2006; 坂野 2009)。

他方、ギムナジウムへと進んだ生徒は大学をはじめとする高等教育機関へ進学するためのパスポートであるアビトゥーア取得を目指す。高等教育機関へと入学した者は、専門的、実践的な学びを深め、卒業後は専門的な職に就く。高等教育を修了することで得られる

学歴は、この国では職業資格ともなっている。

そのため、ドイツでの高等教育への進学は一部のエリートのみが行うものとみなされていたが、第二次世界大戦後の「アビトゥーアの大衆化」(望田 1998)によってギムナジウム、大学への進学者は増加した。この傾向は現在も変わらず、2016年の高等教育への進学率は44%と10年前の33%より増えている(Destatis, Wissenschaftszentrum Berlin für Sozialforschung 2018)。

ドイツにおける高等教育への関心は高まっているが、大学を卒業した学生が大学での学んだ内容や取得した学位とは関連のない職種に就く可能性も高まっている。いわゆる「不適切就業(inadequate Beschäftigung)」には、約2割程度の修了生があてはまる(小松 2005)とされ、教育から職業への学生の円滑で適切な移行が妨げているとされる。

そこで本研究では、大学に進学したドイツ人学生を対象として、学生の学校から大学への移行においてど

のような経験が見られたか、および大学から職業への移行ではどのような展望を持っているのかを明らかにすることを目的とする。

先行研究

高等教育へと進学した若者は、どのように職業へと移行し、どのような職業観を持っているのか。現代のライフコースは選択肢が多様になると同時に、適切な移行が困難になりつつもある。久木元は、ヨーロッパ各国の移行研究から、若者と大人の間を行ったり戻ったりする「ヨーヨー型の移行」を紹介し、この移行においては大人になるという「ゴール」が見えづらくなり、戻ってしまうことも可能であること、個々人の経歴に焦点を当てたバイオグラフィ研究への関心が高まっていることを述べている（久木元 2009）。また、ライフコースの語りそのものがかつてとは異なっており、若い世代の語りは彼らより年上の世代に比べて、自分を語りの中心に据えた内容が多く見られた、と伊藤は生活史調査の結果から指摘する（伊藤 2003）。

ドイツにおける大学は、かつては公務員、研究者や上級の専門職に就くことを希望する者が進学する場所であり、その進学率も低かった。しかし上述の通り、進学率の上昇に伴い、大学の大衆化も進んだ。社会的に青少年の研究をまとめた Hurrelmann と Quenzel (2012) は、80年代以降の不況や学校システムの変化をはじめとする様々な要素が若者に高等教育への進学意欲に拍車をかけたことを指摘する。

職業移行の国際比較という観点では、日本と他国の教育から職業への移行研究の分析例が挙げられる（小方 2009; 吉本 1998, 2001）。吉本は、ドイツでのデュアルシステムは80年代後半からの欧米の若年者の失業者増加の影響をほとんど受けなかったと評価している（吉本 1998）。日独英の大学卒業者に対する調査の分析を行なった小方は、大学と職業の関連性についての考察を行なっている。大学と職業の関係を日本・イギリスとドイツに分類し、日本とイギリスでは初期キャリアの中で専門性を身に付けていく一方で、ドイツでは大卒者は大学での専門と職業とをマッチさせて完成した状態で職に就くとした（小方 2009）。吉本では、ヨーロッパ諸国と日本の大学卒業者の比較において、必ずしもドイツの大卒者が大学での知識を職業に活かして移行できているわけではないとし（吉本 2001）、日本の大学で得た学習知識が役に立たないと一面的に見なすことに対して警告している。

ドイツの職業移行の分析では、多喜は、日・独・米の3か国のPISAデータの比較によって、ドイツでは学校トラックが進学と職業への期待を強く規定し、学校トラックが将来像を規定していることを明らかにした（多喜 2011）。望田は景気の悪化によって、大学卒業生の就職率悪化と学生の在学期間が長期化していることについて触れているが、その原因は大学が大衆化してもなお大学のイメージが「エリート養成機関」として固定されていることであると指摘している（望田 1998）。また、小松は学生が専攻し、取得した学位とは異なる領域の職に就く「不適切就業」者が増えていることを述べている（小松 2005）。大学をはじめとする学制と、大学卒業生に対する社会や学生本人のイメージの硬直性が、就業移行の妨げになっていると言える。学生の職業への移行についてはハインドルフが、ドイツではこれまで実証的研究が少なかったことを指摘している。その上で、大学卒業生にまで及んでいる失業を回避するために大学や大学同窓会が提供するキャリアサポートの活動のケーススタディを通して、学生に必要な支援策を提示している（ハインドルフ 2008）。

先行研究では、ドイツにおいては教育から職業への移行に際して、大学での専攻や学びとの関連が重視されること、にもかかわらず大学をはじめとする高等教育機関においても獲得した資格に見合わない職に就く可能性のあることが指摘されている。これらの研究では国別の比較や量的なデータを用いてドイツの特徴や日本との比較が行なわれているが、久木元（久木元 2009）の指摘するように、移行の困難さにおいては個人の語りが重要であるのに学生個人の大学進学についての動機や職業観については明らかにされていない。本研究では大学生へのインタビュー調査をもとに、学生の職業を巡る意識を明らかにする。

研究方法と手順

調査の概要

本研究では、ドイツにおける大学への進学動機と学内での学習から学生の職業観を探るため、大学生を対象とした半構造化インタビュー調査のデータを用いる。また、サンプリングを示すために、事前に行なった質問紙調査の概要についても触れる。データは、ドイツのノルトライン＝ヴェストファーレン州（以下 NRW 州）の大学に通う学生を対象に2015年に取得した。調査地である NRW 州はドイツ西部に位置し、

ルール工業地帯を擁しているため工業が盛んである。また、歴史的には東西分裂時代の西ドイツ首都であったボンも州内にあり、政治・経済の中心的な地域でもあったため、人口も多い。

調査対象者は筆者と交流のあった大学教員や知人などの協力を得てコンタクトを取った。具体的には、対象大学の授業時間前後にウェブ上の質問紙調査協力への依頼書を配布し、その中でインタビュー調査への協力が可能とした者の連絡先へ筆者がメールを送った。ウェブ上の質問紙に回答する前に、依頼書と口頭により倫理的配慮について、また調査への回答をもって調査の趣旨に同意したと見なす旨を説明した。

このウェブ上の質問紙調査では、76名の回答を得た。そのうちインタビュー調査には男性4名、女性4名の計8名の調査対象者をつながりを持った。対象者とは、1対1で大学構内や学食などで会ったが、調査対象者の希望によって、対象者の自宅近辺のカフェをインタビューの場所とすることもあった。全てのインタビューにおいて、事前にICレコーダーでの録音の許可と倫理的な配慮についての説明をし、内容に同意する署名を得てから調査を行なった。得られた音声はテープ起こしを行なってドイツ語でデータ化された。

インタビュー時の質問内容は(1)将来展望全般に関して、(2)将来の職業の希望や就職活動への関心について、(3)結婚することや子どもを持つことへの意識や関心について、の3つの分野について尋ねたが、調査対象者の語りの内容や属性に合わせて内容の変更や省略も行なった。

対象者の概要

インタビュー対象者を集めるための、また調査大学

での調査対象者の傾向を知るために行なったウェブ上の質問紙調査の回答者は、女性が5割強とやや多かった。また、30歳以上の学生も1割おり、年齢構成が多様であることが分かる。両親の就業の有無は、父親は8割以上が職に就いており、無職(年金受給者・主夫)は5%であった。一方で、母親は7割近くが就業していたが、そのうち約16%はパートタイムであり(父親は0)、無職の者も2割いた。出身地では、NRW州出身者が7割を超えており、調査地であるNRW州では州内の大学に進む者が多いことが考えられる。一方で、旧東ドイツ地域出身者は1割にも満たず、インタビュー調査では全員がNRW州をはじめとする旧西ドイツ地域出身者であったため、本研究では東地域出身者の意識や実態を知ることはできない。また、回答者の専攻では、文系が8割を超え、理系は1割程度である。インタビュー調査においても、明らかに理系専攻と名乗る学生は1名であるため、理系学生の意識を探ることも難しい。

続いて、本研究の対象者を一覧に示した(Table 1)。本研究のインタビュー対象者の学生は全て学部生である。対象者の年齢は、日本の学部学生の年齢として想定されるものより高く、30代の学生も2名いる。その2名とも一度別の大学で今とは異なった課程を学んで学位を得て、職を得た後、職業を継続しながら再度大学で学び始めた。アルバイトなどの週平均労働時間は各自異なるが、職業を継続している上述の2名は30時間程度働いていることが分かる。また、それ以上にアルバイトを中心とした生活を送る学生も1名いる。大学の現在の課程を終えた後、さらに進学・留学して学び続けることを希望する者が3名いる。

Table1 インタビュー調査対象者一覧

名前* (性別/年齢)	希望進路	労働時間(週)	両親職(父/母)	出身地	専攻	住居
アントン (男性 / 24)	進学・留学	0時間	無職/パート	旧州	音楽学	寮
ベアーテ (女性 / 34)	就労中	~30時間	無職/無職	NRW州	教職	同棲
カストル (男性 / 24)	進学・留学	不規則	—/正社員	旧州	情報学	WG**
ドーリス (女性 / 24)	就労中	~15時間	正社員/パート	NRW州	経済学	実家***
エレナ (女性 / 22)	未定	~10時間	公務員/公務員	NRW州	教育学	WG**
フリッツ (男性 / 30)	就労中	~30時間	正社員/無職	旧州	教職	同棲
ゲオルグ (男性 / 26)	就労予定	30時間~	正社員/正社員	NRW州	教職	実家
ヒルダ (女性 / 19)	進学・留学	0時間	正社員/パート	旧州	物理学	寮

*名前は全て仮名で、調査順にアルファベットの頭文字を割り当てた

**WG(Wohngemeinschaft) = 住居共同体の略、ルームシェア

***質問紙調査時点、インタビュー時にパートナーと同棲を始めていた

分析方法

学生の職業に関連した将来像を明らかにするという本研究の目的に基づき、以下では自立の認識や大学進学の原因、職業選択などの学生が語る内容を分析対象としている。本研究では、現象や事例、概念同士を継続的に比較（フリック 2002；佐藤 2008）することでコード化されたデータを分析した。テープ起こしによってテキスト化されたインタビューデータや概念、コード間を常に比較し、結果の妥当性を図った。

インタビューはドイツ語で行われており、引用部分のみを日本語に翻訳した。翻訳に当たっては直訳を心がけたが、訳した際の読みやすさや文脈を考慮して語を補う、語順を変えるなどした。また、和訳後の文章は日本語が分かるドイツ人の知人と共に語の確認を行った。

結果と考察

自立と将来像を話す相手

ここでは、ドイツ人学生が自身のことを社会へ出ていくに足る大人であるかどうかを語った内容と、将来展望についての語りから、誰とどのようなことを話し、自らの進路を決定したのかについて語りの分析を行なう。

学生へのインタビューに際して、現在の自分自身の自立状況について尋ねた際、大半の調査対象者は、自分は自立している、自分を大人だと思うという回答が得られた。法的な成人基準である年齢を根拠とする者や、比較的長時間働く学生は、経済的基盤のあることを挙げる者が多かった。また、パートナーと生活を共にしている者は、親から離れて自身の世帯を持って暮らすことも自立していることの理由となっていた。

経済学を専攻し、税理士の助手として専攻に関連した職場でも働いているというドーリスの語りは、これらの自立状況を端的に表していると言える。

ドーリス：一月前からパートナーと引越しをして、世帯を持ったの。また、仕事にも行っているから、大人になったと思う。

親元から離れて独立したことと、仕事を持つことが彼女の考える自立だと推察される。その一方で、教育学が主専攻のエレーナは、自分を大人だとは思っていないと答えた。

エレーナ：私は他の大人と比べると、私の考えではとても、彼らは大人らしく振舞うの。そう、私はそれで、自分は大人じゃないって感じる。[中略]（彼らは）

もう将来の計画を持っているの。しっかりした計画を。

彼女の言う「大人らしく振舞う」人は、安定した人生を持っている人のことである。エレーナは、ドーリスと年齢が近く、アルバイトもしているが、ドーリスとは異なって自分を大人だとは思っておらず、他者との比較で自身の自立の程度を評価しており、経済基盤や離家が必ずしも自立の根拠となっているわけではないことが分かる。調査協力者のうち、10代であったヒルダも自身が大人ではないと答えるが、以下のようにその理由を述べる。

ヒルダ：私は時々、物事をどうやるかをまだ分かっていない。例えば飛行機を予約したり、納税申告をしたり、そういうのも分からない。

大人であるためには他者への共感と物事の処理の仕方が必要だとヒルダは言う。後者のいわゆる生活の知識が欠けているために自分はまだ大人ではないと判断している様子が見えられた。

また、将来のことを話す相手やその内容からも、学生の自立意識をある程度推察することが出来る。先程自身のことを大人ではないと語ったヒルダは、将来のことを話す相手は家族や友人が主になると言う。実際に、父親が物理学者であるという彼女は、親の勧めに沿って大学進学後の専攻を決定した。

ヒルダ：大抵、（親や友人から）アドバイスを受けます。それで私は、してくれた提案を実行する。[中略]（たとえば勉強を）私が辞めるべきかどうか考えていた時に、両親は私に、物理をもっと勉強し続けるように助言しました。それをはっきりと受け入れました。（他にも希望はあったが）物理学の方がいい仕事を得る機会があるし、楽しいから。難しいけれど、楽しい限りは問題ない。

彼女は普段から父親が仕事でどのような研究や仕事をしているかを聞くことがあり、物理学の勉強自体も苦ではないという。そのため、子どもの頃はお話を作ることが好きで、ギムナジウム時代に日本文化に興味を持っていたことから、大学では文系の学科を専攻しようとしていた彼女だが、勉強の楽しさや職業上のチャンスの多さからからヒルダは物理学の専攻を決めた。この語りでは、周囲の人との日常の会話や相談の中から、専攻や将来就く職業の方向を決めることまで行なっていることがうかがえる。

パートナーと暮らしているというフリッツは、親とは今後の方針について話はするが、話し合いはわずかで、その相手はむしろパートナーとなっていると言う。

フリッツ：自分はもちろんパートナーと将来の計画について、つまり、定期的に何を自分達は次にしたいかについて話す。親とは少ししか話さない。というのも、自分の将来は両親からは独立したものだから。自分の計画は両親に依存していないし、両親は自分のすることにももちろん興味を持っているけれど、彼らは自分が何をすべきかを言わないから。だからパートナーと話し合うよ。

同棲をしている者や交際中の者は特に、親からは離れて友人やパートナーに、より個人的なことを話している傾向が見られた。それはフリッツの言うように自分の人生が親からは独立しており、親の延長線上にあるのではなく、パートナーと人生を共に歩むからということが見てとれる。

フリッツと同様に一度大学で学位を取得したベアータは、大学での研究プロジェクトに従事しながら、今回の調査の少し前に、全く別の学科に入学し直した。彼女は自分の将来のことを、パートナーや友人に相談することがあると言い、「今のパートナーと一緒にいること、子どもを持つこと、楽しい仕事を見つけること」をよく話すとしている。

ドーリスもまた、ベアータ同様にパートナーと暮らしており、パートナーとの関係や子どもを持つことについて考えるという。その際、「何があろうとも仕事を片手間にはするだろうし。というのも、子どもができた後も家にいるのは時代に即してはいないと思うから」と仕事を続ける姿勢を見せた。彼女は税理士のもとで専門的な訓練も積み、家族を持った後も専業主婦になることは望んでいないようであった。旧西ドイツ地域では保育所の普及率が低く、また未就学児を持つ女性の就労率も旧東ドイツ地域と比較すると低い (Destatis, Wissenschaftszentrum Berlin für Sozialforschung 2018)。今回の調査対象者に旧東ドイツ地域出身者がいないため、出身地域による語りの比較は行えないが、少なくとも若い世代の間では、仕事を続ける意識のあることが確認できた。また、将来のことを話す際に、男性は自分のパートナーがいたとしても、就職や今後の仕事の話が中心になるのに対し、女性は結婚すべきかどうかや子どもを持つかどうかについても仕事同様の割合でインタビュー中に現れることが多く、男女によって将来像を明確に語る部分と語らない部分のあることが分かった。

大学進学と専攻選択

続いて、大学生が進学するきっかけとなったこと、

現在の専攻を選択するに至った経緯の語りを取り上げる。上述したヒルダのように、親との相談によって専攻を決定した学生もいるが、自身のギムナジウム時代の経験や興味から進学を決めた学生もいる。現在音楽学を専攻しているアントンは、入学前は音楽の教職に就くための専攻を選び、選考試験の受験準備などしていたが、ギムナジウムでのクラス旅行がきっかけで現在の専攻を志すようになった。

アントン：僕は音楽のアンサンブルの指揮をする先生を手伝った。そのときに、子どもと一緒に働くのが自分の優先(事項)ではなくて、音楽についての内容を取り持つことだと、僕の考えでは、教師の仕事が最重要ではないということに気付いたんだ。

自分のやりたいことが同じ音楽専攻ではあっても、教職関連コースは学士課程より就学期間が長いなど一般的な音楽関連業への就職とは学ぶ内容が大きく異なる。本当にやりたいことが、教師のように子どもに授業を行なうことではなく、音楽のよさや特徴を他の人へと紹介し、伝えていくことと気付いたことが、アントンの進路選択の理由であった。このように、子どもの頃からの興味や関心は、ドイツ人学生にとって大学進学に向けた専攻を選ぶという進路選択だけでなく、将来的な職業選択の機会にも活かされることが彼の語りからは分かる。同様に、現在情報学が専攻のカストルは、子どもの頃からやりたいことが一貫しており、それが専攻や職業選択の展望にもつながっていた。

カストル：ちょうど子どもだった頃からずっと、テレビゲームのプログラミングをしたいというのがあったから。

少年時代から遊んでいたゲームを自身でも作りたいという理由から、現在の専攻を選んだと彼は言う。カストルの興味深い点は、アビトゥーアを取得した後、すぐに大学には入らずにアルバイト生活を送っていた時期に、日本語という全く知らない言葉に興味を持ち、それを契機として大学への入学を決めたことである。

カストル：アビトゥーアの後2年間、休憩を取っていたんだ。バイトして、旅行して、バイトして、旅行して…それで、よして。新しい言葉を習うのが気に入ったし、新しい土地を訪れるのも、好きだった。もつと長い時間でも。それで言ったんだ。どっちにしても、将来たくさんの言葉ができるようになりたい、またどこかに旅行をしたい。

すぐに大学進学を決めるわけではなく、アビトゥーアの資格を持って職業訓練を行なうわけでもなく、ア

アルバイトと旅行を繰り返す「休憩」を彼はとっていた。カストルのように進学前に蛇行した経歴を積み上げる者だけでなく、フリッツやベアーテのように卒業後に新しい専攻に再入学する者もあり、彼らの語りからは、「ヨーヨー型の移行」を経て、よりよい職業を得るための遍歴を重ねていることが推察された。

学生の将来像に関する語りの多くからは、ドイツでの生活史調査（伊藤 2003）と重なる部分が見られ、自分を主体にしてやりたい勉強や職業に関連することから専攻を決めていた。また、その選択にあたっては親や周囲のすすめだけではなく、自らが主体となって将来について考えていることが分かる。

大学での学びと就職

本研究では、学生は学部での勉強を終えた後、さらに進学・留学を希望する者が多い傾向にあり、専攻で学んだ内容の専門性をより高める意識が高かった。しかし、大学に残って研究を続けるというよりは、大学での学習内容を活かすような職に就くことを重視する姿勢が強く表れている。例えばエレナは、学部卒業後も大学院に進むかすぐに卒業するかは決めていなかったが、職に就くことと大学で学位を取ることの関連性をこう述べる。

エレナ：大学での勉強を修了した後、フルタイムで働くと、より責任を負わなければいけないし、学生より多くのお金を稼ぐことを求められるだろうから。卒業した後、より学問と仕事は合致しているはずだから、幼稚園で働きたいと思わない。幼稚園で働くためには勉強をしなくてもいいから。

エレナは教育学を専攻としながら、幼稚園をアルバイト先としている。今のアルバイト先では、学校で学んだことや取得する学位が幼稚園で働くこととはあまり関係がないため、彼女はそのまま正規の職員として働く気がなかった。彼女の語りからは、大学での専攻で得た知識と学位が職務を担う上での責任を果たすために必要であることを示唆しているとも考えられる。「学問と仕事の合致」という語りからは、先行研究のような、大学での専攻分野と卒業後に就く職につながるのがあることが自明視されていることが見てとれる。学生達は、大学における学問と結びついた職を希望していることが分かった。

しかし、ドイツの大学生の就職は、業界の景気がよいか、企業が実習先を提供する余裕があるか、など市場の動向に左右される。工学部を一度出て就職し、現在は週の半分を勤務しながら、日本語教員資格の取得

を目指しているフリッツは今の周囲の学生の様子とかつての自分とを比べている。

フリッツ：一つ目の学位は違ったから分かるけど[中略]日本学（だけ）でいい仕事を見つけるのはとっても難しい、とつてもとつても困難だよ。他の（若い日本学）学生は卒業前になって初めて知らなければいけないんだろけれど。

彼の語りからは専門知識を積んだとしても、その経験に見合うポストにつけるとは限らず、特に日本語学のような分野ではポストの数が少なく、就職に苦勞する可能性のあることが述べられている。このように、大学での学びと就職が関連しているために、その学びに見合った職に就くことが求められ、それが難しい場合はいわゆる持っている学位に見合わない職に就く必要のあることも示唆される。

大学での学びと関連する仕事に就きたいとする以外に、学生は働くことや職場にどのようなことを求めているだろうか。今回の調査対象者の多くは仕事への「楽しみ」が感じられること、「自己実現」できる場であることを重視していた。一度就職したことのあるフリッツは、「契約書に書いていないこと」たとえば通勤のしやすさや仕事の「単調さ」がどのくらいかをアルバイトとは異なった就職の際は重視するべきだ、という。こうした語りからは仕事のしやすさや続けやすさといった観点から職探しを行なう様子がうかがえる。

その一方で、金銭的な面は生活が成り立てばいいという語りが多く見られた。以下のようにアントンも多額の給料が必ずしもいるわけではないと言う。

アントン：たくさんお金を稼ぐ必要はない、けれど、貧しくなることを心配しなくてもいい生活ができて、将来的には家族を養うには十分なぐらいにはあるといいけれど。

アントン同様にエレナもまた、「まともに生活できるぐらいで十分」な給料でよいと述べ、多くの学生が給料は高ければいいが必要以上はいらぬことを述べ、それよりは自分の関心にあった仕事に就くことややりがいを求めていた。ただ、学生がそのように語るのには、大学での学位取得を目指す時点で、彼らは他の職業訓練を受けた者よりも、比較的給料水準の高い職に就く可能性が高いため、給料を考慮に入れていないことも考えられる。

学生は就職に際しては、専門性を高めてからの就職を望むため、修士課程への進学を希望し、学んだ内容との関係が深い仕事に就きたいと考えていることが彼

らの語りから分かった。また、専門的な職に就くこと以外には、その仕事に関心があるか、楽しみが感じられるか、といった点を重視していた。学生が大学での学びが職業の専門性につながることは、小方（小方 2009）をはじめとする研究においても現れており、ドイツの大学生の特徴となっている。こうした学内での学びと就職について関連付けた語りによって、学生は大学入学以前の比較的早い時期から関心のある職業をある程度決めていることも明らかとなった。

まとめと今後の課題

ドイツの大学生が大学進学の際にどのように専攻を決定したか、また卒業後の職業についてどのような希望を持っているのか、職業をめぐる将来像を中心に本研究では扱った。同じ州内の出身でも、実家を出て、寮などでの一人暮らし、あるいはパートナーと生活しており、アルバイトや奨学金などで一定の経済的な自立を達成している学生がインタビューでは多くいたが、将来的な計画が確立されていることや生活についての知識が身につけているかどうか、自分を「自立している」、「大人である」と見なす根拠の一つとなることが分かった。また、パートナーのいる者は自分の将来についてパートナーと話し合い、決めている様子や、女性が将来について語る時に家族を持つことについて言及する様子なども語りから明らかになった。

大学へと進学し、現在学んでいる専攻を選ぶきっかけについても学生に尋ねたが、親からの助言や就職の有利さ、子どもの頃からの自分の関心が理由として挙げられており、比較的早い段階から就職までを含めた進路選択を行なっていることが伺えた。大学進学に際しては、アビトゥーアを取得後、すぐに大学に入学する者だけでなく、「休憩」をとってやりたいことを見つけてから入学する者や、一度大学を卒業し、仕事をしながら全く別の専攻を学ぶために再入学するケースもあり、大学入学へと至る道筋が多様であることが示された。そして卒業後の進路として、専門知識を身に付けて大学での学びと関連する分野での就職を望んでいることが分かった。この大学での専門知識と就職の関連性は強く、それを自明視するような語りも見られた。しかし、就職経験のある者からは、学ぶ分野によっては専攻と関連した就職は難しいとの意見も出ており、大学で得た学位と見合わない職に就く「不適切就業」との関連を示唆する語りがあった。学生の学びと職業への移行を支援するためにも、ハインドルフ（ハ

インドルフ 2008）の示すような学生の就職支援制度の拡充が大学には求められるであろうし、学生自身の在学時からの職業訓練を視野に入れた学びも必要となっていくだろう。

日本におけるドイツの若者の進学や職業移行の研究は、主に若年者の失業対策やデュアルシステムの紹介と、それら政策の日本への応用を主眼としており、学生本人の高等教育進学の動機や職業に移行する際の意識や問題点などはあまり明らかにされていなかった。本研究は職業だけでなく家族形成なども含めた学生の希望する将来像の分析から、彼らの自意識や進学、就職についての意識を質的なアプローチを用いて明らかにした。日本をはじめとする他国の大学生の進学動機や職業意識の研究結果とも今後比較し、ドイツの大学生の特徴について検討を重ねたい。

本研究では、ドイツの西側地域出身者・西側地域の大学のみが調査対象者となり、学生の出身地域や在籍する大学の所在地などが学生の語りにどのような影響を与えているかを検討することはできなかった。また、対象者の学生が総合大学に限られてしまい、専門大学をはじめとする他の高等教育機関にはアプローチできなかった。出身地や居住地、教育機関の種別の違いは語りに影響を及ぼしている可能性があるため、そうした属性を持った対象者への調査を継続して行いたい。

参考文献

- フリック, U. (2002) 『質的研究入門 <人間の科学> のための方法論』小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳, 春秋社.
- ハインドルフ, V. (2008) 「ドイツ高等教育機関のキャリア支援プログラム」, 吉岡いずみ訳『生涯学習・キャリア教育研究』第4号, 63-81.
- Hurrelmann, K., Quenzel, G. (2013) *Lebensphase Jugend: Eine Einführung in die sozialwissenschaftliche Jugendforschung*. 12. Auflage, Beltz Juventa, Weinheim und Basel.
- 伊藤美登里 (2003) 『共同の時間と自分の時間—生活史に見る時間意識の日独比較—』, 文化書房博文社.
- 小松君代 (2005) 「ドイツにおける高等教育と就業問題」, 『四国大学附属経営情報研究所年報』第11号, 85-94.
- 久木元真吾 (2009) 「若者の大人への移行と「働く」ということ」, 小杉礼子編『若者の働きかた』叢書・働くということ第6巻, ミネルヴァ書房, 202-227.
- 望田幸男 (1998) 「「アビトゥーアの大衆化」のバランス

- シート——戦後教育の問題水域」、『ドイツ・エリート養成の社会史：ギムナジウムとアビトゥーアの世界』、ミネルヴァ書房、265-284.
- 小方直幸（2009）「若者のキャリアと教育——日独英の比較から——」、小杉礼子編『若者の働きかた』叢書・働くということ第6巻、ミネルヴァ書房、143-157.
- 坂野慎二（2006）「ドイツのキャリア教育と就業支援」、小杉礼子・堀有喜衣編『キャリア教育と就業支援 フリーター・ニート対策の国際比較』勁草書房、99-141.
- （2009）「ドイツにおける高等教育非進学者の職業への移行——デュアルシステムの現状と課題——」、小杉礼子編『若者の働きかた』叢書・働くということ第6巻、ミネルヴァ書房、74-94.
- 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社.
- Schultz, T., Hurrelmann, K., (Hrsg.) (2013) Die Akademiker-Gesellschaft: Müssen in Zukunft alle studieren?, Beltz Juventa, Weinheim und Basel.
- Statistisches Bundesamt (Destatis) (2018) Hochschulen auf einen Blick, Ausgabe 2018., https://www.destatis.de/DE/Publikationen/Thematisch/BildungForschungKultur/Hochschulen/BroschuereHochschulenBlick0110010187004.pdf?__blob=publicationFile [2019.03.17]
- Statistisches Bundesamt (Destatis), Wissenschaftszentrum Berlin für Sozialforschung ed., (2018) Datenreport 2018 :<http://www.bpb.de/nachschlagen/datenreport-2018/> [2019.03.17]
- 多喜弘文（2011）「日・独・米における学校トラックと進学期待・職業期待——学校と職業の接続に着目して——」、『社会学評論』, 62(2), 136-152.
- 吉本圭一（1998）「学校から職業への移行の国際比較——移行システムの効率性と改革の方向——」、『日本労働研究雑誌』 No.457/July, 41-51.
- （2001）「大学教育と職業への移行——日欧比較調査結果より——」、『高等教育研究』第4集, 113-134.

2019年3月17日 受稿